

永綱憲悟先生をお送りする言葉

伊藤 裕子

国際関係学部の創設以来、誰よりも本学部の発展に尽くしてこられた永綱憲悟先生がご退職される。まずは永綱先生の長年にわたる多大なご貢献に深くお礼申し上げたい。

永綱先生は1984年に本学経済学部国際関係学科に着任されたのち、国際関係学部草創期の1990年代には執行部で教務主任補佐、教務主任としてご尽力された。私自身はこの頃の永綱先生のことを存じ上げないが、ある職員の方が「とても頼りになる判断力の素晴らしい教務主任」で「一人一人を尊重してくださった」と語られたのをうかがい、当時から今に至るまで変わらない永綱先生のお仕事ぶりとお人柄を確認できたような思いがした。

2000年に本学部の鯉淵信一教授が学長に選出されると、本学部からも数名の先生方が学長執行部に入られたが、なかでも永綱先生はご自身の提案で創設された「学長付教学委員」に就任して鯉淵学長をサポートされた。一見控えめな名称だが、職務が決まっておらず自由に動ける役職の創設とそれへのご就任は、今思えばとても永綱先生らしく、また永綱先生の強みを存分に生かすものだったように思う。鯉淵政権で永綱先生は2号館建設や画期的な「アジア夢カレッジ・キャリア開発プログラム」の創設などにおいて活躍されたほか、インターネット時代の到来に合わせ教員へのPC支給開始、特任教員制度の導入、そして当時不備の多かった就業規則の整備など、「学長付教学委員」として実に多方面で様々な政策を提案して実現され、大学運営に

貢献された。

この頃の永綱先生を、他学部の一部教員が時々「影のフィクサー」などと呼ぶのを聞き、当時、大学運営のことを全く知らなかった私はただ憤慨していたものである。しかし今になって振り返れば、そのくらい永綱先生は大学行政の様々な局面においてキーパーソンの役割を担っておられたのだと思う。

2010年に学部教員の厚い信頼を受けて学部長に就任されると、永綱先生は名実ともに「表」に立たれてリーダーシップを発揮されるようになり、「影の…」などと呼ぶ声は全く聞かれなくなった。永綱学部長の2期4年間における学部最大の取り組みは、2012年度多文化コミュニケーション学科の創設であろう。2学科化構想に全学的な承認を取り付けるために毎週他学部執行部を招き、お茶菓子を配って「説得工作」を行ったのは永綱学部長ならではの配慮だった。もう一つの大きな出来事は、同じく2012年度に文科省初のグローバル人材育成推進事業に学部として採択されたことである。永綱学部長が運営責任者となり、学部と関係部署が協力して国際交流の発展に力を注いだ。さらにカリキュラム上も英語を重視して各種の英語専門科目を創設し、TOEIC600点を卒業要件として専門総合ゼミで英語学習を推進するなど、永綱学部長のリーダーシップがあったからこそ実現できたことも多かった。

学科新設もG人材事業採択も、準備段階から実現・運営まで、その中心になられた永綱先生のご苦勞は本当に大きかったと思う。これらの事業の推進には当然ながら周到な準備と学内関係諸部署からの多大な協力が欠かせないが、永綱学部長はそのための学内折衝において絶大な力を発揮された。それは時間をかけて自らの考えを丁寧に説明し、理解を得るための努力を惜しまない、永綱先生の誠実なお人柄と指導力の賜物だったと思う。

また永綱先生は、学部内の協調をとっても重視された。個々の教職員を尊重してくださり、相手を否定したり罵倒するようなことは絶対に口にされない。本学部の内規のほとんどは永綱先生の発案で制定されたものだが、それ

もスムーズな学部運営のためだけでなく、学部内の不和を未然に防ぐことも目的とされていたように思う。学部内の協調といえば、新旧執行部の交代時に「慰労会」を始められたのも、新学部長となられた永綱先生だった。毎年、年度替わりの時期に新旧執行部で永綱先生が提案してくださるレストランに行き、退任される旧執行部の先生方を労いながら美味しいお食事を楽しみ、ガス抜きをする。この頃執行部にいることの多かった私は「慰労会」に何度も参加させていただいたが、毎回本当に楽しかった。

学部で20年以上にわたり永綱先生とご一緒しながら共同研究の機会がなかったことは、今になって悔やまれる。永綱先生はロシア政治研究で学会にも貢献され、特にウラジーミル・プーチンの研究においては永綱先生の右に出る研究者はいない。大学・学部行政でお忙しくても毎年論文を執筆され、しかも紀要原稿の締切をきちんと守られることでも有名だった。ロシア研究者としての永綱先生を垣間見る機会のご研究以外でも何度かあった。「出会いの広場」で先生がロシアンハットをかぶってロシア民謡を踊ったり、いわゆる「夜の教授会」にロシア産キャビアをご持参くださったりと、ロシア研究者ぶりを発揮してほかの教員を楽しませてくださった。

個人的にも、私自身、どれだけ永綱先生にお世話になったか計り知れない。採用面接で初めてお会いし、その後ありがたくもお電話をいただいたところから始まり（この「採用候補者への電話」も永綱先生が始められたそう）、同じ政治学分野の教員として何かにつけご相談させていただいた。旧6号館地下の教職員食堂で昼食をご一緒しながら、ゼミや講義運営についてのアイデアやアドヴァイスを随分いただいたことも良き思い出である。

多くの教職員が「上司にしたい人物」として永綱先生のお名前を挙げていることからわかるように、永綱先生には「リーダー」の名がふさわしい。文科省や大学の動向に関する情報に常にアンテナを張り、様々なアイデアを提案し、実行に移すために自ら動き、そのために必要な交渉や根回しをいとわない。しかしご自分の計画に固執せず他者の意見に耳を傾けてくださる。そうした永綱先生のご姿勢が良く出ていたのが、2021年10月の学長ご就任

時のスピーチだろう。「やってみなはれ」と教職員をエンカレッジし、お互いを尊重しあう職場にすることの大切さを強調された。他方で、「10の提案をして1つでも実現すればいいほうだ」という永綱先生のお言葉も何度もうかがってきた。ご自身がこれまで様々な提案をされ、周囲の協力を得て実現したことも、ご苦勞の末に諸般の事情で実現できなかったことも多々ありだったであろう、ご経験から出る実感のこもったお言葉だと思う。

こうして永綱先生との思い出を振り返ると、永綱先生がどれだけ新しいことを始められ、我々がどれだけ永綱先生に依存してきたかをあらためて思い知る。永綱先生が学部教員としてご退職されることで、学部の羅針盤を失うような喪失感を感じるのは私だけではないだろう。永綱先生のこれまでの長年のご指導とご貢献に、あらためて心より感謝申し上げたい。そしてこれからもくれぐれもご健康にご留意されつつ、学長として一層ご活躍くださることを祈念して、永綱先生をお送りする言葉としたい。